九州地方における キリシタン語彙の 受容史

広島経済大学　小川　俊輔

1. 序論

1.1 目的、方法、先行研究

日本国内におけるキリスト教の布教と受容は、1549年のFrancisco de Xavierらの鹿児島上陸に始まる。本稿の目的は、1549年から現在にいたる約460年間におけるキリシタン語彙の受容史について考察をおこなうことである。対象とする地域は九州地方である。

これまで筆者は、「渡来語」の受容史の解明を目的とする研究を進めてきた。「渡来語」とは、16世紀半ば以降にキリスト教とともに日本へ伝えられた外来語の総称である。「渡来語」には、キリスト教の教義・信仰そのものにかかわるChristão（キリシタン）、Padre（パードレ、バテレン）、Cruz（クルス）、Santa Maria（サンタマリア）などのキリシタン語彙と、それにかかわらないVidro（ビードロ）、Banco（バンコ）、Cambodia（カボチャ）などがある。

キリシタン語彙については、これまで、文献国語史の方法による数多くの研究がおこなわれてきた（土井, 1933：楳垣, 1943：橋本, 1961：小島, 2009など）。しかし、九州地方全域における方言実地調査にもとづいて、どの地域でどのように各語が受容されたのかを地理言語学の方法によって考察した研究はこれまでみられなかった。また、民俗学では各県ごとに宗教や民俗に関する分布地図が作られてきたが、この民俗地図には、日本の伝統的な宗教の項目が扱われるだけで、キリスト教やイスラム教などの項目は対象外に置かれていた（天野（監）、1999−2003など）。

筆者は、九州地方におけるキリシタン語彙の受容史について、九州地方全域における方言実地調査にもとづく事例研究を進めてきた（Ogawa, 2006：小川, 2007a：小川, 2007b：小川, 2007c：Ogawa, 2010aなど。取り上げた語はChristão、Santa Maria、Pater、Padre、Paraisoなど）。本稿では、先行研究の成果を整理し、Contas（コンタス）及びRosario（ロザリオ）を例にしながら、筆者のこれまでの事例研究をまとめるかたちでキリシタン語彙の受容史について記述する（標題に「受容史」と掲げてはいるが、キリシタン語彙を伝えた布教者側の言語戦略についても適宜言及する）。ContasとRosarioは、カトリック教会で「ロザリオの祈り」をするさいに用いられる信仰道具である。小異はあるが、形状や使用法は仏教徒が用いる数珠とよく似ている。

1.2 日本キリスト教史

キリシタン語彙の受容史を念頭に置けば、日本におけるキリスト教の歴史は、次のとおり全5期に区分できる。

中世近世受容期［1549（天文18）年〈キリスト教の伝来〉～1644（寛永21）年〈最後の宣教師殉教〉］、**近世禁教期**［1644（寛永21）年～1854（嘉永7）年〈日米和親条約〉］、**幕末維新復活期**［1854（嘉永7）年 ～1873（明治6）年〈切支丹禁制の高札の撤去〉］、**近代差別期**［1873（明治6）年 ～1945（昭和20）年〈太平洋戦争終結〉］、**戦後受容期**［1945（昭和20）年～現在］。

次章では、具体的な事例を取り上げながら各期におけるキリシタン語彙の実態を記述する。

2. 本論

2.1 中世近世受容期［1549年～1644年］

2.1.1 仏教語による翻訳

この期におけるキリシタン宣教師の言語戦略については、多くの先行研究がある（土井, 1933：岸野, 1986：宮崎, 1998：小島, 2009など）。彼らは、キリスト教の教義や信仰に関わる概念を説明するさいに仏教語を借用した。たとえばDeusには「大日」があてられた。この言語戦略は、民衆のキリスト教理解に役立ったが、一方でキリスト教を誤解させる危険性をはらんでいた。そして実際に彼らは「新しい仏教の一派を広めに来た仏僧」であると誤解されている（岸野, 1986：宮崎, 1998）。

ともあれ、当時の日本人は、仏教語を中心とする翻訳語によってキリスト教の教義や信仰を理解したようである。ContasとRosarioについては、これを「数珠」と理解したに相違ない。少し時代が下るが、キリシタン排斥を目的として1648年に書かれた『對治邪執論』には、「キリシタンの用いるContasは仏教の数珠を真似たものである」との記述がみられる（引用は海老澤他（校注）（1970）による。ルビも同様。以下、下線はすべて筆者）。

是寸須（ぜずす）の人となりや胆大麁心（たんだいそしん）、虚妄巧見。釈氏に帰すといへども、ただその名相を学び、その窮玄に到らず。偽りて釈氏の法相を竊（ぬす）み、還（また）、外道邪見をなす。あるいはその名を改めてその実を執り、あるいはその事を同じくしてその理を異にす。故に梵天王（ぼんてんのう）を改め泥烏須（でうす）と名づけ、諸梵衆を改め安助（あんじょ）と名づけ、天堂を改め頗羅夷曾（ぱらいぞ）と名づけ、人道（にんどう）を改め跗婁伽倒利夜（ぶるがとうりょ）と名づけ、地獄を改め因辺婁濃（いんへるの）と名づけ、灌頂（かんじょう）を改め婆宇低寸茂（ぼうてすも）と名づけ、懺悔を改め混毘三（こんひさん）と名づけ、十善戒を改め十（とお）の麻駄免徒（まだめんと）と名づけ、比丘尼（びくに）を改め毘婁善（びるぜん）と名づけ、錫杖（しゃくじょう）を改め恵寸苦茂餓阿徒（えすくもがあと）と名づけ、地餅林藤を改め麻三（まさん）の菓と名づけ、数珠を改め混多須（こんたす）と名づく。

2.1.2 原語主義の徹底

上記のとおり、布教当初は日本人にキリスト教の概念を説明するさいに仏教語などの翻訳語が用いられていた。しかし、宣教師たちは翻訳語では日本人にキリスト教を正しく理解させることはできないと考えるようになり、ラテン語、ポルトガル語をそのまま用いるようになった。Rodrigues（1604−1608）『日本大文典』には「日本語に欠けた語をわれわれの国語から取入れる方法並にその語を如何に発音すべきかといふ事に就いて」と題する条があり、そこにはDeus、Padre、Paraiso、Oratioなど多数の語が記されている。翻訳語と原語のどちらを用いるべきかという議論は、同時期にキリシタンの布教活動がおこなわれていた中国でも問題になっていた（菊地, 2003）。

1590年には、天正遣欧少年使節の帰国とともに西欧から印刷機が持ち込まれ、多くの文献が宣教師の手によって出版された。以下は1600年刊・ローマ字本の『ドチリナ・キリシタン』におけるRosarioの用例である（引用は海老澤他（編）（1993）による。ルビは省略した）。

貴きビルゼンマリヤのロザイロとて百五十遍のオラシヨの事。

師　御母サンタマリヤのロザイロと申すは、パアテルノステル十五巻アベマリヤ五十巻なり。これを御主ゼズキリシトのご作業に宛がひ奉り、十五の観念に分くるなり。初めの五か条は御母サンタマリヤ御悦びの題目なるによって、即ち悦びの観念と号するなり。中の五か条は御主のごパシヨンをサンタマリヤ深くご愁歎なし給ふによって、御悲しみの観念と申すなり。後の五か条は御主ゼズキリシト甦り給ひてより、サンタマリヤご歓喜深きが故に、ゴラウリヤの観念と名付るなり（中略－引用者）もしこの百五十遍のオラシヨを毎日勤め奉る事叶はぬにおいては、せめてその三分一なる何れの五か条なりとも、望みに従って観念して、パアテルノステル五巻、アベマリヤ五十ぺん申すべし。

これとほぼ同内容の文言が、1600年に長崎で編纂・出版された『おらしよの飜譯』にも記されている。また、『おらしよの飜譯』には、かな表記されたラテン語の祈りも収められており、今日でもよく耳にするAve Mariaの祈りについては次のように記されている（引用文上段は林（編）（1981）による。□は虫害による欠字、下段は現行通用のラテン語文）。

あべまりやがらしやぺれな　○　だうみぬすてゑくん

Ave Maria, gratia plena, Dominus tecum,
ぺ口ぢたつういんむりゑりぷす ○ ゑつぺねぢつす
benedicta tu in mulieribus, et benedictus
ふるつす べんちりすつうい ○ ぜずゝ
fructus ventris tui Jesus.
さんたまりや まあてるでい ○
Sancta Maria mater Dei,

おらぽろなうびすぺかたうりぶす ○
ora pro nobis peccatoribus,
ぬんくゑついんおら もるちすなうすてれ ○ あめん
nunc, et in hora mortis nostrae. Amen

ところで、当時の民衆はどの程度キリスト教の教義を理解し、洗礼を受けていたのだろうか。このことについては、資料が少なく、詳細は不明であるが（宮崎, 1996）、禁教令が出された1614年当時のキリシタン人口は37万人前後にのぼるという（五野井, 1990）。

では、キリシタン語彙の受容はどうであったか。結論を先に記すと、キリスト教に入信した人々には、ある程度確実にキリシタン語彙が受容されたとみてよい。なぜならば、こんにちにおいてなお、当時のキリシタン語彙を保持・伝承し、使用している人々が、長崎県を中心として九州各地に存在するからである。

次頁の地図1は、ロザリオをどのように呼ぶかについて2003年から2005年にかけて調査した結果を示したものである。長崎県は他県に比べて調査地点数も多いのだが、Contas系の語が多くの地域で回答（使用）されている。次々頁の地図2は、これまでにカクレキリシタンの信徒組織の存在が確認された地域と1948年におけるカトリック教会の建立地を示したものである。地図1と地図2を見比べると、Contas系の語が使用されてきた地域は、これまでにカクレキリシタンの信徒組織の存在が確認された地域と重なっていることに気が付く。このことから、「**中世末期にContasが受容され、潜伏キリシタン・カクレキリシタン[1]によって伝承され、現在に至った**」という仮説を導くことができる。以下では、この仮説を検証しながら考察を進める。

[1] 本稿では宮崎（2002）にならい、「カクレキリシタン」を次のように定義する。すなわち、「カクレキリシタン」とは、「キリシタン時代にキリスト教に改宗した者の子孫で、1873年に禁教令が解かれた後もカトリックとは一線を画し、潜伏時代より伝承されてきた信仰形態を組織下にあって維持し続けている人びとおよびその宗教」のことを差す。最後の宣教師小西マンショが殉教したとされる1644年～1873年における同種の信仰者及びその宗教を「潜伏キリシタン」と呼び、「カクレキリシタン」とは区別する。

2.2 近世禁教期［1644年～1854年］

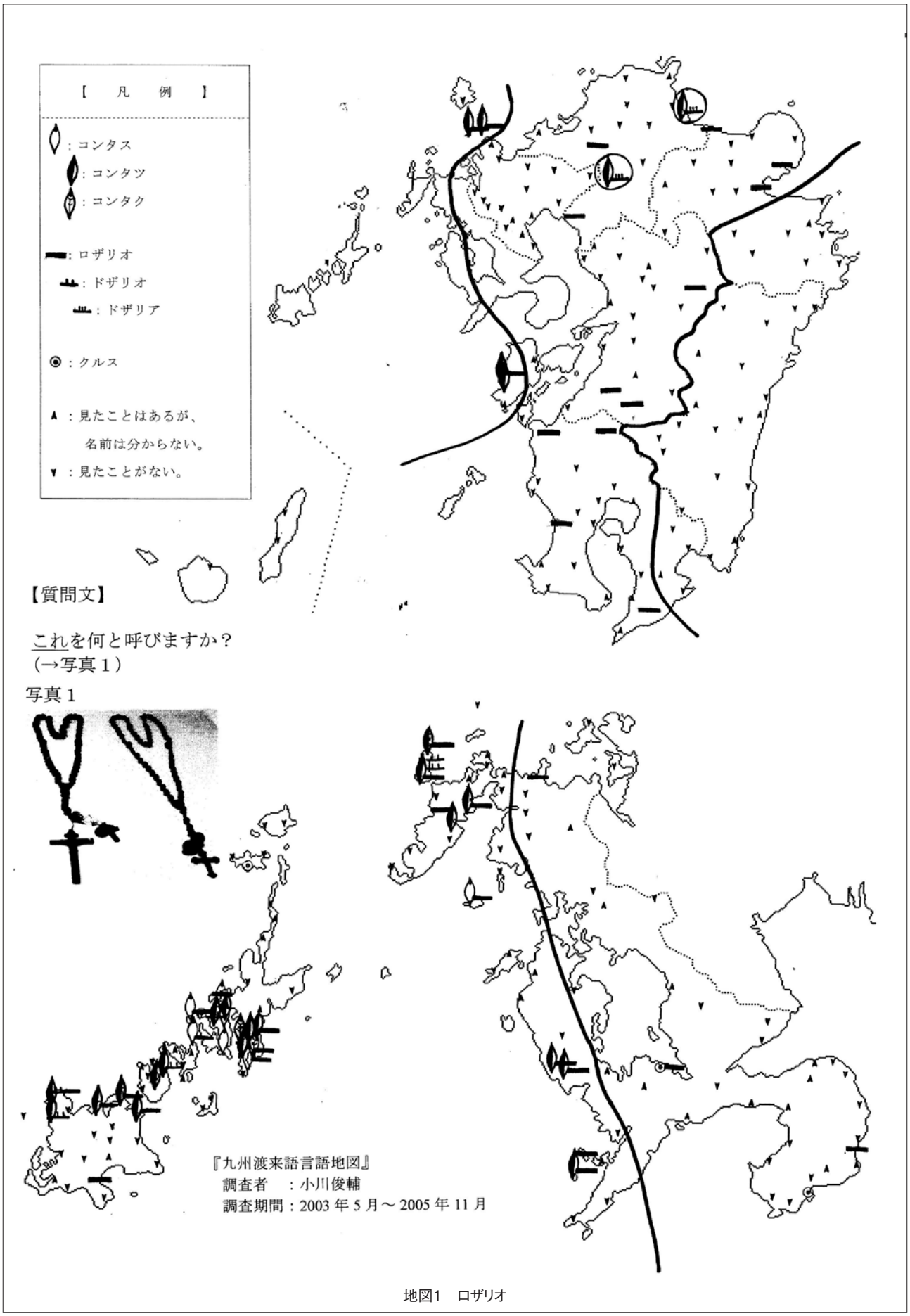
2.2.1 オラショの変容とContas及びRosario

1549年以降、小規模な仏教徒との衝突はあったものの、キリシタンは順調にその信者を増やしていった。転機となったのが、1587年の豊臣秀吉による「伴天連追放令」の発令である。以後、江戸幕府に引き継がれたキリシタン禁制政策により、キリスト教は300年近くに及ぶ禁教の時代を迎える。

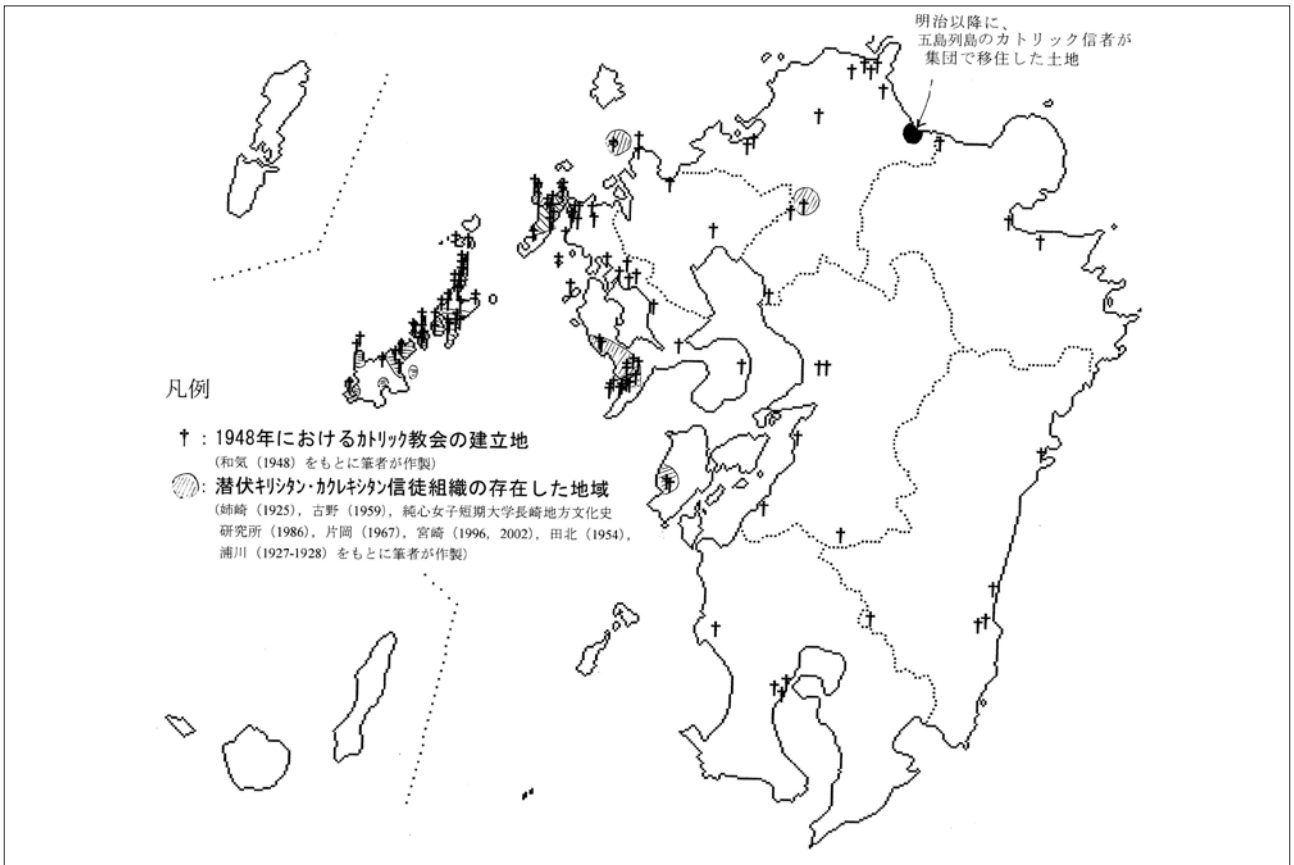
1644年には国内に残った最後の宣教師小西マンショが殉教し、その結果、世界史上類をみないとも言われる潜伏キリシタン・カクレキシタンの誕生をみたのである。では彼らは宣教師によって伝えられたキリシタン語彙をどのように、また、どの程度継承したのだろうか。この問題を解くため、長崎県平戸市生月町の潜伏キリシタン・カクレキリシタンが伝承してきた「オラショ」をみてみよう（1971年12月、同町壱部地区のカクレキリシタン指導者である出口左吉、大岡留一、平田義雄、川崎森一、増山隼吉、小川政治の6氏によってまとめられた『生月旧キリシタンごしょう』を翻刻した宮崎（1996）による）。

御母さんたまりや、対し奉る、申し上ぐるべし、百五十ぺんのございりょうの内、十五のみすてりやすはすここもんなり、このみすてりやは三つに分くるなり、五つは喜び、五つは悲しみ、今五つはぐるりようざなり、毎日此のございりょうの内、三分の一は申すべし

引用文中の「ございりょう」は2.1.2で引用した『ドチリナ・キリシタン』中の「ロザイロ」が変化したものである。宮崎（1996）はカクレキリシタンのオラショについて「**日本文のオラショはその意味を理解しようと努力すれば可能であるにもかかわらず、まったくその努力はなされていないといってよい。立て板に水のごとく、いかに早く流暢に暗唱することができるか、という点にのみ関心が払われている**」（p.85）と断じている。ラテン語のオラショも伝承されているが、呪文化しており、その意味は忘却されている。2.1.2に掲げたAve Mariaの祈りは、次のようである（引用は長崎県教育委員会（1999）による）。


【 凡 例 】
：コンタス
：コンタツ
：コンタク
：ロザリオ
：ドザリオ
：ドザリア
：クルス
：見たことはあるが、
名前は分からない。
：見たことがない。
【質問文】
これを何と呼びますか？
（→写真１）
写真１
『九州渡来語言語地図』
調査者　：小川俊輔
調査期間：2003 年 5 月～ 2005 年 11 月

地図1　ロザリオ



地図2

長崎県平戸市根獅子町

アメマリヤ、ガーラスサーベンナノー、ベスベコ、ベレントツーワ、イーモリエベス、ベレントヨツメ、ベンツルヒツツル、ジゾウサンタマリヤ様、サンジュウワンナビルコバテス、ノベス、スベツカラズ、ナンキンノーリヤ、モンタルノンタル。アーメン十。

長崎県五島市玉之浦町布浦

アベマリヤ、カシャベナ、ドメレコ、ベラットツヨ、イモノヤビツ、イキリンナ、ナレンツ、クロンツ、レンケゼツ、ゼゼツ御母三太丸ヤ、ビリコーマリヤ、デンデンタイカ、タクランナ、ゲンギヤトラゲ、ナンキリイモノツツリ、アンメン両須。

これらのオラショと、1600年刊の『おらしよの飜譯』に記されたラテン語文との間にはかなりの異同が認められる。

ではContasはどうであったか。実は、2.1.2に掲げた「中世末期にContasが受容され、潜伏キリシタン・カクレキリシタンによって伝承され、現在に至った」という仮説を覆す事実が認められるのである。筆者がカクレキリシタン（祖父母の代までカクレキリシタンであった人を含む）の人々にロザリオの写真を見せてその名前を尋ね、またコンタス、ロザリオということばを聞いたことがあるかどうかを尋ねたところ、次のように回答された。冒頭に調査対象地域と調査日を記す。

長崎県平戸市生月町里免·2004年5月7日

それはロザリオという。カトリック信者が使用する道具。「コンタス」ということばは聞いたことがない。

長崎県南松浦郡新上五島町桐古里郷深浦

·2004年3月8日

コンタツ、コンタス、コンタク、ロザリオなどという。カトリック信者が使用する道具。

長崎県五島市奈留町浦郷樫木山·2004年3月12日 及び

長崎県平戸市生月町壱部大字御崎·2004年5月6日

分からない。コンタツということばは聞いたことがない。ロザリオということばは耳にしたことはあるが、どのようなものか分からない。この土地では聞か

ない。

長崎県五島市奈留町泊大字前島・2004年3月10日 及び
長崎県平戸市山中町・2004年5月10日
どこかで見たことはあるようだが名を知らない。コンタツ、ロザリオということばは聞いたことがない。

長崎県平戸市春日町・2004年5月9日
分からない。コンタツ、ロザリオということばは、聞いたことがない。

長崎県平戸市山中町・2004年5月10日
どこかで見たことがあるようだが名を知らない。コンタツということばは聞いたことがない。ロザリオということばは耳にしたことはあるが、どのようなものか分からない。この土地では聞かない。

以上のコメントから、こんにちのカクレキリシタンは、中世期に受容したContasとRosarioを伝承していないことが分かる。しかし、宮崎（1996）に、葬儀のさいにカクレキリシタンが唱えるオラショとして以下の文言が記されている。

如何にクロース 自らかからせ給う 人間の悪のけ給いや御印 一心にくらみなし拝み奉る 人間の悪のけ給いや逃る為にべきものなり 尊き八日の七夜様を授かる人は この御コンタツの御功力を以て いつも天のパライゾウなり アンメゾー

同書の記述によれば、Contasは葬儀の場で用いられているわけではないようであるが、この記述は、カクレキリシタンがContasを現在も使用していることを思わせる。しかし、既に述べたとおり、彼らはオラショの中に出てくることばの意味を理解していないようなのである。また信仰道具としてのContasはカクレキリシタンの信仰対象になっている。宮崎（1996）は「ロザリオの完品を見ることは少なく、多くの場合は断片にすぎない。ロザリオは数も少なく、ある程度いきわたるには、いくつかに切断しなければならなかったのかもしれない。」（p.213）「ロザリオ、メダイ、十字架等々は箱にしまって秘されており、しばしば「開けずが箱」といわれ、他見を許さないものもある。潜伏時代からの先祖の伝承がそのまま受け継がれているものである。」（p.214）という。つまり、カクレキリシタンは信仰道具（もの）としてのコンタス及び、「コンタス」ということばを伝承しているが、中世末期に受容された「ものとことばの関係」は大きく変容してしまっているのである。そして筆者の現地調査の限りにおいてではあるが、「オラショ」に出てくるはずの「コンタツ」という言葉がこんにちのカクレキリシタンの人々には、伝承されていない。なお、Contasが信仰対象になっていることについては、川村（2003）が現在の大分県大分市高田地区の16世紀末における信徒組織の実態を述べつつ次のように記している。

「この講は定期的な集会をさすものであり、高田の「民家」でおこなわれていた。それが「民家」であったということが重要である。ルイス・アルメイダが、そうした集団に「定め」をもたらし、小礼拝堂をどのように管理するか、祈るときにはどのような手順をとるかを参会者が熟知するように配慮した。その上、アルメイダは、祝福したコンタツ（ロザリヨ）を民家にしつらえられた祭壇の上にのこしたという。ここでは聖別されたコンタツが宗教的シンボルとして共同体の中心となっている。」（p.236）以上のことから、Contas系の語が使用されている地域とカクレキリシタン信徒組織所在地域との重なりから導かれた2.1.2の仮説は否定された。

2.2.2 キリシタン語彙の変容

300年近くに及ぶ禁教の結果、多くのキリシタン語彙は、その意味を忘れられ、語形も変化した。たとえばポルトガル語Padre（神父）は「伴天連」などの漢字があてられたために「バテレン」と読まれるようになった。この「バテレン」は多くの意味に変化し、江戸時代中期以降「荒々しい芸風」を意味したり、侠者の一派を「ばてれん組」と称したりすることもあった。さらに、徳島県や香川県小豆島では「ばてれん」が元気な娘、おてんばの意味で用いられ、新潟県佐渡では放蕩者や道楽者を表す語として使用されている（日本国語大辞典第2版編集委員会（編），2000−2002）。また、福岡、佐賀、長崎、熊本の4県において、神父、修道女、カトリック信者、外国人、変な人、お転婆な女の子、素性の悪い女、お洒落な人の意味で「バテレン」が用いられている（小川，2007b）。

「ゼンチョ」はポルトガル語Gentio（異教徒）に由来する語である。「異教徒」の意味（中世末期に伝えられた意味）の「ゼンチョ」が、長崎県の離島・沿岸地域を中心に、福岡、佐

賀、熊本の4県にまたがって使用されている。また、9地点において「仏教徒」の意味で、2地点で「仏教徒の子どもがキリスト教徒の子どもをからかう語」として使用されている（Ogawa, 2010b）。

「**アーメン**」はカトリック教会において祈りのさいに用いられる「そうなりますように」といった意味合いの語である。この語が長崎県の諸地域で「カトリック教徒」を意味する差別語・蔑称語として用いられている（小川, 2007a）。

以上のように、キリシタン語彙の多くは禁教の時代を経て現在に至るまでの間に、その意味や語形が変化している。

2.3 幕末維新復活期［1854年 ～1873年］

2.3.1 Petitjeanの言語戦略、カトリック教会に戻った潜伏キリシタン

江戸時代末期になると外国船が日本近海に現れるようになり、江戸幕府は1854年に日米和親条約を、1858年には日米修好通商条約を締結する。そして1865年、長崎に大浦天主堂が建設され、間もなく、この大浦天主堂において、潜伏キリシタンの人々とパリ外国宣教会のBernard Thadée Petitjean司教との歴史的な再会が果たされるのである。当初、明治新政府は江戸幕府のキリスト教禁教政策を引き継ぐつもりであった。しかし、欧米各国から猛烈な抗議を受け、1873年に切支丹禁制の高札の撤去が実現することとなる（片岡, 1957：高木, 1978−1980）。

Petitjeanは、潜伏キリシタンとの歴史的再会の後、彼らを教会に呼び戻し、正式なカトリックの教化をおこなうために腐心する。それを着実に進める手だてとして考えたのが、キリシタン語彙を用いた教理書の編纂と出版、配布であった。Petitjeanは潜伏キリシタンが伝えた中世末期の教理書を収集し、「キリシタン語彙を活用する」という編集方針に沿って教理書を作成した（松崎, 1928：ラウレス, 1940：海老澤, 1943）。彼の1865年5月29日付の書簡には、この言語戦略について、その意図が明確に記されている（純心女子短期大学長崎地方文化史研究所（編）, 1986）。

横浜教会の神父であり、中国四川省において出版された漢語教理書を直訳した『聖教要理問答』を編纂したPierre Mounicouは、教理書の編纂にあたり、キリシタン語彙ではなく漢語による翻訳語を用いるべきだと考えていた。しかし、Petitjeanは、潜伏キリシタンが先祖伝来のキリシタン語彙（の変容した語）を用いていることに気付いていたため、彼らを教会に呼び戻すためには、キリシタン語彙を用いて布教活動をおこなうべきだと考えたのである。この言語戦略に則って編纂され、出版された教理書の1つに、『聖教日課』（1868年刊）がある（引用は明治文化研究会（編）（1928）による）。

童身聖（びるじんさんた）まりやは、さんがぶりゑるあるかんしよを以（もって）御告（ごつげ）ありければ、其御胎内（そのごたいない）において天主（でうす）の御子（こ）ひりよは人と成給（なりたま）ふと言ふ事。

Petitjeanは、漢訳語の上にラテン語・ポルトガル語の音をカタカナ表記したルビを付したのである。こうした彼の努力により多くの潜伏キリシタンがカトリック教会に戻り、洗礼を受けることとなった（松崎, 1928）。そして同書には、ContasとRosarioの名称について直接言及している箇所がある。

日本のきりしたん、こんたすといひ来りしは、則此ろざりよの事也

この文言は、同書の1874年版では次のように改められている（引用は上田敏全集刊行会（編）（1985）による）。

日本のきりしたん（こんたす）とおぼえしはこのろざりよのことなり

この記述からPetitjeanはContasではなくRosarioを正式名称だと考えていたことが分かる。Rosarioが正式名称であるという考え方は、Juan de Ruedaが1623年にマニラで出版した『ロザリオの経』及びPetitjeanが1869年に長崎で出版した『玫瑰（ろざ）花冠（りよ）記録』にも記されている。

ここで、2.2.1で否定された「中世末期にContasが受容され、潜伏キリシタン・カクレキリシタンによって伝承され、現在に至った」という仮説について再度検討したい。この仮説はContas系の語が使用されてきた地域（地図1）とこれまでにカクレキリシタンの信徒組織の存在が確認された地域（地図2）とが重なっていることから導かれたものである。しかし、今日のカクレキリシタンはカトリック教会で「ロザリオの祈り」をするさいに用いる信仰道具（及びその名称）としてのContasを伝承していない（2.2.1）。ここで注目したいのが1948年におけるカトリック教会の建立地である。地図2をみると、1948年においてカトリック教会が高密度で建立されている地域は、カクレキリシタン信徒組織

の存在が確認された地域とよく重なっていることに気が付く。これは、Petitjeanの努力によって多くの潜伏キリシタンがカトリック教会に戻り、洗礼を受け、その地で教会を建てたからである。そして、教会に戻った信徒は、中世末期以来の歴史を持つキリシタン語彙を用いて作られた教理書を目にした。そこに、**「こんたす」**と**「ろざりよ」**の2語が記されていたのだ。こうして彼らカトリック信徒が、中世末期以来の歴史を持つContasとRosarioを今日まで伝えたのではないかと考えられる。これを整理すればContas及びRosarioの受容史は次項のようにまとめることができる。

2.3.2 ContasとRosarioの受容から土着まで

中世末期、キリシタンの伝来とともにContasとRosarioが伝えられ、初め、日本人はそれを仏教における数珠に類するものとして理解した。やがて、ContasまたはRosarioというポルトガル語によって、それを認識するようになった（**中世近世受容期**）。その後、禁教の時代を迎え、非キリシタンはもとより、潜伏キリシタンの人々の間でも、Contas及びRosarioの本来の使用法、名称は忘れられていった（**近世禁教期**）。しかし、幕末・維新期頃からカトリック教会へ戻った潜伏キリシタン・カクレキリシタンは、Petitjeanの言語戦略によって再びContasとRosarioの使用法と名称とを学習（獲得）し、今日まで伝えたのである（**幕末維新復活期**以降）。

なお、上の引用のとおり、布教者はContasではなくRosarioを正式名称であると考えていたが、今日においてもContasという言い方を維持しているカトリック信者がかなり多くいる（地図1）。その理由については、Ogawa（2010a）で詳しく考察したので、参照されたい。

2.4 近代差別期［1873年 ～1945年］

2.4.1 キリスト教徒への迫害とキリシタン語彙

1889年、「大日本帝国憲法」の発布により信教の自由が保証される。しかし、キリスト教及びキリスト教徒への迫害や差別は1945年8月の太平洋戦争終結まで続いた（高木，1985）。「天皇制近代国家の樹立」にさいして、神の下の平等を説くキリスト教は、為政者にとって不都合だったからである（金田，1985）。また、信徒を奪われることを恐れた在来の宗教（特に仏教）の抵抗はたいへん大きく、組織的なキリスト教排斥運動が展開された（大濱，1979：安丸・宮地（校注），1988：児玉，2005）。さらに対米英開戦後、キリスト教は敵性宗教と見なされ、治安維持法による厳しい取り締まりを受けた（土肥、1980）。木場田（1975）には、戦時中、カトリック信徒であるという理由で教師に殴られ、教科書に印刷された踏み絵を踏むよう命令されたことなどが生々しく記されている。

近代差別期において、キリスト教徒以外の一般の人々にキリシタン語彙が受容されることは基本的にはあり得なかった。しかし、終戦を機にその状況は徐々に変化してゆく。

2.5 戦後受容期［1945年～現在］

2.5.1 キリスト教徒に対する差別意識の薄れ

1945年8月15日、太平洋戦争が終結する。そして、GHQの指導の下、「大日本帝国憲法」に代わる新しい「日本国憲法」が制定された。新しい憲法は、様々な意味で前憲法と異なる理念によって作られた。なかでもキリスト教及びキリシタン語彙にきわめて大きな影響を及ぼしたと考えられるのが、①法の下の平等（第14条「**すべて国民は、法の下に平等であって、人種、信条、性別、社会的身分又は門地により、政治的、経済的又は社会的関係において、差別されない。**」）と②信教の自由の保障（第20条「**信教の自由は、何人に対してもこれを保障する。いかなる宗教団体も、国から特権を受け、又は政治上の権力を行使してはならない。**」）の2点であったとみられる。

2009年3月、筆者は長崎市浦上天主堂において同地のカトリック信徒に対する聞き取り調査をおこなった。そのさい「キリスト教及びキリスト教徒への差別はいつまで続いたか」との質問に対し、明確に「終戦まで続いた」との回答があった。さらに「戦時中は、カトリックに対する迫害が激しかった。軍隊でも学校でも差別を受けた」とも言われた。新憲法の制定により、すぐさま非キリスト者のキリスト教及びキリスト教徒に対する意識や行動が一変したとは考えにくい。しかし、キリスト教徒自身が「終戦を境にして差別がなくなった」と感じている事実は注目してよいだろう。小川（2007a）に示された「キリスト教・キリスト教信者に対する差別・差別意識の有無」に関する分布図を見ると、「差別・差別意識が今もある」と回答されたのはわずかに3地点で、「かつては差別・差別意識があったが、今はない」との回答が62地点においてなされている。被調査者は1915年から1945年の間に生まれた方々であるから、キリスト教・キリスト教徒に対する差別・差別意識は、終戦を挟んだおよそ100年の間に薄れ、消えていったものと考えられる。

2.5.2 キリシタン語彙の商業利用

キリシタン語彙の商業利用については、Ogawa（2010b）に、長崎県雲仙市小浜町で生産されているお菓子「クルス」、長崎県島原市で生産されている焼酎「バテレン」、大分県大分市で生産されているお菓子「ザビエル」が紹介されている。「クルス」は1964年、「バテレン」は1973年、「ザビエル」は1962年と、いずれも戦後に開発・命名された商品である。そして、いずれの商品の生産者・命名者ともキリスト教徒ではない。命名の動機は「当地にふさわしい、魅力的かつ印象的な名を付けたい」というものであった。また、宮崎県日向市には、その形状から「十文字の海」と呼ばれてきた観光地があった。近年この観光地は「クルスの海」と再命名され、観光PRがおこなわれている（宮崎県延岡市北方町川水流（2005年10月16日）及び宮崎県日向市細島（2005年10月17日）におこなった臨地調査における被調査者からの教示）。

大分県速見郡日出町では、2006年10月に「第1回ザビエルの道ウオーキング大会」が開催された。毎年1回おこなわれ、2009年10月には第4回大会が開催されている。このようなキリシタン語彙の商業利用は、今後いっそう進むものと思われる。

Rosarioは、サトウ・ハチロー作詞、古関裕而作曲の歌謡曲「長崎の鐘」（1949年発売）によって、広く知られることになった。この曲は1951年1月3日に放送された第1回NHK紅白歌合戦において、藤山一郎によって番組の最後を飾る曲（いわゆる大トリ）として歌われた。その2番の歌詞にRosarioが登場する。

召されて妻は 天国へ 別れてひとり 旅立ちぬ
かたみに残る ロザリオの 鎖に白き わが涙
なぐさめ はげまし 長崎の ああ 長崎の鐘が鳴る

この曲によって多くの非キリスト教徒がロザリオという語を初めて耳にし、記憶に留めることになった。筆者が九州全域でおこなった調査において、ロザリオの写真を見せてその名前を尋ねたときに「分からない。見たことがない。」と答えた被調査者に対して「ロザリオということばを聞いたことがありませんか。」と続けて尋ねると、多くの方が「長崎の鐘」に言及して「これがロザリオなのですか。」「「長崎の鐘」に出てくるのでことばだけは知っていたが、どのようなものかは知らなかった。」と発言した。

3. 結論

本稿では、キリシタン伝来→禁制→解禁→差別→日本国憲法による「信教の自由」の保障という日本キリスト教史、潜伏キリシタン及びカクレキリシタンの存在、カトリック教会の分布などのいわゆる「言語外情報」と関わらせながら特にContas及びRosarioを取り上げて九州地方におけるキリシタン語彙の受容史について考察した。キリシタン語彙の受容史は、キリスト教の受容史と重なる部分が多い。今後は本稿で触れることができなかったプロテスタントにおける言語の問題と併せて事例研究を積み重ね、より詳細で精密な記述を目指したい。また、対象地域を日本全域に拡大し、日本国内における地域差についても考えてみたい。中国・韓国など、同じようなキリスト教史を持つ国々におけるキリシタン語彙の受容史との対照研究も今後の課題である。

【参考文献】

天野武（監）（1999-2003）. 都道府県別日本の民俗分布地図集成 全13巻 東洋書林

姉崎正治（1925）. 切支丹宗門の迫害と潜伏 同文館

土肥昭夫（1980）. 日本プロテスタント・キリスト教史 新教出版社

土井忠生（1933）. 日本耶蘇会の用語に就いて 楳垣実（編）外来語研究、3、7−22.

Ebata, Yoshio（2001）. A Geolinguistic Study on the Greeting Expressions and Behavior in Japan. 社会言語科学、3（2）、27−38.

海老澤有道（1943）. 切支丹典籍叢考 拓文堂

海老澤有道・H.チースリク・土井忠生・大塚光信（校注）（1970）. キリシタン書 排耶書 日本思想体系25 岩波書店

海老澤有道・井出勝美・岸野久（編）（1993）. <キリシタン文学双書> キリシタン教理書 キリシタン研究 第30輯 教文館

越中哲也（1981）. 長崎における排キリシタンの伝承について キリシタン研究、21、15−22

藤原与一（1991）. 昭和日本語の方言 第7巻 九州西側<筑前 肥後>三要地方言 −福岡県桜井方言・熊本県白水村方言・熊本県天草大江方言− 三弥井書房

古野清人（1959）. 隠れキリシタン 至文堂

五野井隆史（1990）. 日本キリスト教史 吉川弘文館

橋本進吉（1961）. キリシタン教義の研究 岩波書店

林重雄（編）（1981）. 笠間索引叢刊77 ばうちずもの授けやう おらしよの飜訳 本文及び総索引 笠間書院

井上史雄（2000）. 日本語の値段 大修館書店

井上史雄（2007）. 方言の経済価値 小林隆（編）方言の機能、岩波書店、67−104.

純心女子短期大学長崎地方文化史研究所（編）（1986）. プチジャン司教書簡集 純心女子短期大学

金田隆一（1985）. 戦時下キリスト教の抵抗と挫折 新教出版社

片岡弥吉（1957）. 日本近代国家成立過程に於ける伊万里県（深堀）異宗徒移送事件 キリシタン研究、4、115−168.

片岡弥吉（1967）. かくれキリシタン 日本放送出版協会
川村信三（2003）. キリシタン信徒組織の誕生と変容 ―「コンフラリヤ」から「こんふらりや」へ キリシタン研究 第40輯 教文館
菊地秀明（2003）. 太平天国にみる異文化受容 山川出版社
岸野久（1986）. フランシスコ・ザビエルの「大日」採用・使用について キリシタン研究、26、185−200.
キリスト教年鑑編集委員会（編）（2009）. キリスト教年鑑2009 キリスト新聞社
木場田直（1975）. 西海の灯 −五島切支丹秘話− 聖母の騎士社
児玉識（2005）. 近世真宗と地域社会 法蔵館
小島幸枝（2009）. コンテムツスムンヂの研究 研究篇・資料篇 武蔵野書院
松崎實（1928）. 天主教の部解題 明治文化研究会（編）明治文化全集 第19巻 宗教篇、日本評論社、5−20.
明治文化研究会（編）（1928）. 明治文化全集 第19巻 宗教篇 日本評論社
宮崎賢太郎（1995）. キリシタン他界観の変容 ―キリシタン時代より現代のカクレキリシタンまで― 純心人文研究、創刊号、103−121.
宮崎賢太郎（1996）. カクレキリシタンの信仰世界 東京大学出版会
宮崎賢太郎（1998）. 日本人のキリスト教受容とその理解 山折哲雄・長田俊樹（編）日本人はキリスト教をどのように受容したか 国際日本文化研究センター、169−212.
宮崎賢太郎（2002）. カクレキリシタン 長崎新聞社
長崎県教育委員会（1999）. 長崎県文化財調査報告書 第153集 長崎県のカクレキリシタン ―長崎県カクレキリシタン習俗調査事業報告書― 長崎県教育委員会
日本キリスト教歴史大事典編集委員会（編）（1988）. 日本キリスト教歴史大事典 教文館
日本国語大辞典第2版編集委員会（編）（2000−2002）. 日本国語大辞典 第2版 全14巻 小学館
Ogawa, Shunsuke（2006）. A Geolinguistic Study on the History of Acceptance of the Christian Vocabulary in the Northwestern Area of the Kyushu District of Japan. Dialectologia et Geolinguistica、13、108−123.
小川俊輔（2007a）. 九州地方域方言におけるキリシタン語彙Christãoの受容史についての地理言語学的研究 広島大学大学院教育学研究科紀要、55（2）、173−182.
小川俊輔（2007b）. 九州地方域方言におけるキリシタン語彙pater/padreの受容史についての地理言語学的研究 国文学攷、192・193、15−25.
小川俊輔（2007c）. 九州地方域方言におけるキリシタン語彙Santa Mariaの受容史についての地理言語学的研究 国語教育研究、48、38−51.
Ogawa, Shunsuke（2010a）. A GEOLINGUISTIC STUDY ON THE HISTORY OF RECEPTION OF 'CONTAS' AND 'ROSARIO' IN THE KYUSHU DISTRICT OF JAPAN AFTER THE 16TH CENTURY. Dialectologia、4、83−106（e−journal:http://www.publicacions.ub.es/revistes/dialectologia4/）
Ogawa, Shunsuke (2010b). On the decay, preservation and restoration of imported Portuguese Christian missionary vocabulary in the Kyushu district of Japan since the 16th century. Slavia Centralis、3(1)、150-161.
小川俊輔（2011）. 日本社会の変容とキリスト教用語 社会言語科学、13（2）、4−19
大濱徹也（1979）. 明治キリスト教会史の研究 吉川弘文館
ラウレス, ヨハネ（1940）プチジャン司教とキリシタン伝統 カトリック研究、20（2）カトリック研究社（純心女子短期大学長崎地方文化史研究所（編）（1986）に再録、225−238.）
Rodrigues, João（1604−1608）. Arte da lingoa de Japan. Nagasaki.（土井忠生訳（1955）. 日本大文典 三省堂）
田北耕也（1954）. 昭和時代の潜伏キリシタン 日本学術振興会
高木一雄（1978−1980）. 明治カトリック教会史 上・中・下 キリシタン文化研究会
高木一雄（1985）. 大正・昭和カトリック教会史3 聖母の騎士社
上田敏全集刊行会（編）（1985）. 定本 上田敏全集 第9巻 教育出版センター
楳垣實（1943）. 日本外来語の研究 青年通信社出版部
浦川和三郎（1927-1928）. 切支丹の復活 日本カトリック刊行会
Viereck, Wolfgang（2006）. The Linguistic and Cultural Significance of the Atlas Linguarum Europae. 川口裕司・亀山郁夫・富盛伸夫・高垣敏博（編）言語情報学研究、9、58−80.
和気清一（編）（1948）. キリスト教年鑑 キリスト新聞社
安丸良夫・宮地正人（校注）（1988）. 日本近代思想体系5 宗教と国家 岩波書店

【参考WEBページ】

第4回「ザビエルの道」ウオーキング大会（大分県日出町HP内）
<http://www.town.hiji.lg.jp/cgi−bin/odb−get.exe?WIT_template=AC020000&WIT_oid=icityv2::Contents::2538>（2009年12月27日）
クルスの海（宮崎県日向市HP内）
<http://www.city.hyuga.miyazaki.jp/index.php>（2009年12月27日）
ざびえる本舗HP
<http://www.zabieru.com/index2.html>（2009年12月27日）

【付記】

1. 本稿と深く関わる論文として、Ogawa（2010a）と小川（2011）がある。前者は、本稿で取り上げたContas及びRosarioの受容史について、特に方言分布の解釈に重点を置いて論述したものである。後者は、キリシタン語彙を含むキリスト教用語の受容史について日本社会の歴史的変容と重ね合わせながら詳しく論述したものである。本稿は、後者を圧縮したうえで、Contas とRosario のケースを書き加えてまとめ直したものである。このため、論旨・文言ともに重なる部分が多い。併せてお読みいただければ幸いである。

2. 方言臨地調査にご協力くださった300名を超える被調査者の皆様、ラテン語の祈り及びカトリック教会における典礼についてご教示を賜った元エリザベト音楽大学の西尾優先生に厚く御礼申し上げる.

3. 本稿は、日本学術振興会平成20・21年度科学研究費補助金若手研究（スタートアップ）（課題番号20820061「九州地方域方言における渡来語の受容史についての地理言語学的研究」）の研究助成による成果の一部である.